

# 神宮文庫蔵『救済付句』翻刻

岩 下 紀 之

本書は、伊地知鉄男『連歌の世界』一九五ページに記載され、そこにおいて、

巻頭句は、

舟路の跡の山はいづくぞ

松原や昨日は見えしあさがすみ

で、現在句数三十三句であるが、第十一句目の前句と付句の間に脱落がある。そのうち『菟玖波集』に十三句、その他『長短抄』『所々返答』に三句重複があり、語句にも多少相違がある。

と、要を得た解説がある。それで本書は新資料とは言えないけれども、全文が活字として紹介されたことはないように思うので、本稿でとりあげてみた。南北朝期の連歌は資料が豊富とは言えないので、このような小句集も精しく調査してみたいと思つたからである。

【救済付句】は、神宮文庫蔵『談の聞書』の一部をなしている。同書は、たて21・8cmよこ15cmの袋綴本一冊で、用紙は楮紙、墨付七十

三丁。洪茶色の表紙に、「談乃聞書」と打つけ書に書いてある。内容は次の通り。

○謹奉悼 前住円覚梅之和尚大禅師

以下追悼文

○賦何人連歌（新撰菟玖波集祈念連歌）

○何人 明応五年八月十九日千句之内独吟

雲晴て鴈かねなひくと山哉 兼載

○宗祇独吟

春や立霞なみのなみの四方の海

これに続いて第三十三丁裏から『救済付句』になる。三十六丁裏まで

四丁分である。以下

○淀渡

○天文廿貳年九月下旬の事にや、以下の連歌関連の書きとめ。

○西明寺殿百首

○詠法楽日吉十禪師宮百首和歌

建曆三年暮春 慈鎮大僧正

○賦何船連歌

君と見はちりひちの山を恁葉哉 言

冬の日なから長閑なるやと 長慶

見てのごとく、まことに雑然たる書きとめであるけれども、書写は一応室町末期までにおさまるのではないかと思う。その頃の連歌数寄の僧侶あたりが、折につけ書きとめた雑記帳といったおもむきである。とすれば、この『救済付句』も、単なる『菟玖波集』からの抜粋でなく、室町期にさかのぼる救済小句集である可能性があろう。

救済関連の句集は、周阿との連歌合、宗砌と番われた連歌合、それにこの『救済付句』と、いずれも成立事情を明らかにしたい。それで、次に他の句集等との共通句を現段階で判明したかぎり列挙してみよう。前句と付句で一まとまりとして考えるので、ここでは付句の番号で示しておく。

- 二 菟玖波集七
- 四 菟玖波集五二、救済宗砌百番連歌合三〇八六、撃蒙抄
- 六 菟玖波集一九四
- 八
- 一〇 菟玖波集九七
- 一二 菟玖波集一六一九、救済宗砌百番連歌合二八七四、撃蒙抄
- 一四 菟玖波集二四七、救済宗砌百番連歌合三〇五四、撃蒙抄

一六 菟玖波集一六三〇

一八

二〇

二二 菟玖波集三七一、救済宗砌百番連歌合三〇三〇、撃蒙抄

二四 文和千句第三の五七、救済宗砌百番連歌合三一〇二

二六 菟玖波集六三一

二八

三〇

三二 菟玖波集五六一、救済宗砌百番連歌合三一〇六、連歌十様、知

連抄、長短抄

三四 救済周阿百番連歌合七九番

三六 長短抄

三八

四〇

四二

四四

四六

四八

五〇

五二

五四

五六

- 五八
- 六〇 菟玖波集一七四七
- 六二 菟玖波集一九五四
- 六四 菟玖波集四三九
- 六六

右で『菟玖波集』は『菟玖波集の研究』付載の本文・番号に従い、『救済宗阿百番連歌合』は、『七賢時代連歌句集』に従っている。『救済宗阿百番連歌合』は汲古書院版影印本、その他は岩波文庫『連歌論集上』による。他書との照合は「まず『長短抄』までとしておいた。それ以後の連歌論についても共通句を指摘できるが、詳細は後日に期したい。

この『救済付句』は小句集ではあるけれども、内容は春六句、夏一句、秋六句、冬八句、恋六句、雑三句というように、部類されている。四季の部は随分不均衡で、夏一句に対し、冬八句、しかも冬は春と秋よりも多くなっている。秋の部分は後で見ると脱落があるようだが、この句数の割合から見ても何十句も落ちているとは考えられない。色々な出典が指摘される句集であるから、編者は機械的に抜き書を作ったのではなく、収集した句を一応配列しなおしたのであろう。

以下、この句集の成立について臆測をめぐらして見たい。『菟玖波集』との共通点が十三句確認できるが、

- 二一 泉す、しく松風そふく

神宮文庫蔵『救済付句』翻刻 (岩下紀之)

二二 紅葉ちり山のをくより時雨きて  
に対し、『菟玖波集』は

泉す、しき松風そふく

三七 住吉のうらの南に月みえて

というのであって、前句は共通だが、付句が異っている。『連歌の世界』ではこれを根拠にして、ここに脱落を想定されたのであろう。

二一 泉す、しく松風そふく

(〇〇 住吉のうらの南に月みえて)

(〇〇

二二 紅葉ちり山のをくより時雨きて

というように、( ) の部分が何句かわからないが脱落したのであろう。さて、このように多くの句が『菟玖波集』と共通しているので、

『救済付句』が出典として『菟玖波集』を最も利用したことは明らかである。逆に『救済付句』が『菟玖波集』の材料になったのではないことは、次の『救済宗阿百番連歌合』との関連で証明できる。

『救済宗阿百番連歌合』は重要な作品としてしばしば注解が試みられてきた。この書は心敬が付句を加えた一本によってのみ伝来し、心敬が独特な個性の作者であるだけに、本文についての慎重なとり扱いが、例えば奥野純一氏によって、心敬のいとなみに重点を置きつつなされている。この連歌合は中世において他に引用される例をあまり見出さないのだが、この『救済付句』三四番は、これから採っている。さて、この連歌合では救済と周阿がほぼ対等に技量を競っており、両

者の入集句数に大差のある『菟玖波集』段階の成立とは考えられない。もちろん『菟玖波集』との共通句はない。このようにして、『菟玖波集』撰進後、周阿が実力を發揮しだした後の成立と考えられている。したがって、この連歌合を材料にしている『救済付句』は『菟玖波集』よりかなり後の成立ということになる。

『救済宗師百番連歌合』との共通句も六句あり、これも少くない数である。このうち五句までは『菟玖波集』とも共通し、連歌合、『救済付句』がともに『菟玖波集』を利用したかとも考えられるのだが、一句だけ『菟玖波集』と重ならない。しかもこの句が『文和千句』の句である。『文和千句』が『菟玖波集』撰集に際し重要な材料となつたことは周知に属するが、そこで採り残された句がこの連歌合に存在するのである。このことは、『菟玖波集』以外にも資料を広く収集した上で、連歌合の救済の部が完成したことを示すのであり、救済連歌の研究にとって貴重な句集と言ふべきであろう。『救済付句』はその採録の対象として『文和千句』まで手を広げたかは疑問であり、この千句からの句はこれのみである。

最後に『長短抄』について述べてみたい。二句共通句を見出したがそのうちこの『救済付句』三六番に関して論じたい。この句は『長短抄』に三度引かれているがそのうちの二つを引いてみよう。

歌合ヨムニハ、飾リフルマワテ題ヲ握ツメテ読、常ノ題ノ歌ニハ変ルベシ、連歌ニモ、キウ題連歌トテ前句一句ニ五人モ十人モ付テ作者ヲカクシテ、当座ノ仕手皆く思くニ点ヲアウ、多分ノ点ヲキ

ウ題ト云、(中略) 中古ニハ好レシ也、救済、周阿一句付ナリ、  
(中略)

春夏秋ニ風ゾカワレル

雪ノトキサテイイカナラム峯ノ松 侍公

花ノ後青葉ナリシガ紅葉シテ 周阿

難解な箇所があるが、この句が救済と周阿の連歌合に詠まれたと言ふ伝承であろう。ところが、一条兼良の『筆のすさび』では、同じ句についてこのように言う。

春夏すぎて秋にこそなれ

雪の比またいかならん峯の松 救済法師

家隆卿をば末の世の人丸とこそ後鳥羽院は仰られ侍れ、しからば侍従公救済をば近き世の連歌の聖とぞ申侍べき、初心の輩は彼が付たる趣きを学び侍べきにこそ、春夏過て秋にこそなれといへる連歌の侍けるに、其人は誰とも聞えず、花ちりし青葉桜の紅葉して、と付たりしは、指合ありて返り侍ると申ば、ての字のてには折合たる故とこそ覚侍れ、是に又三季をかねたる草木などを言ひ鎖り侍らば、同風情になり侍べし、大方指合有て返りたるに付侍らば、花月の景物の出所なりとも口移しにいひ出んは、連歌士の本意にはあらざるべし、如何にもあらぬ方を案じ侍べし、済公の峯の松と付たるこそ及がたく思ひ給れ、

これによれば、この句は普通の百韻の一座における、おそらく周阿の句がかえり句になった時の救済の作ということになる。『長短抄』と『筆

のすさび」の伝承は相互にくい違い、調和させることは不可能である。両方の連歌書ともに、由来の古い作品であるが、句形はそれぞれ異なり、この句が広く世に口伝えて広まっていたことを想像させる。いずれの伝承をとるにしても、『救済付句』が原典ということはないわけである。

さて以上に見るように『救済付句』全三十三句のうち半数以上にあたる十七句が、他書と共通であって、この書の編者は現代の我々と比べて、さほど多く救済の作品を手にしていただけではない。ましてこの貧弱な句集を救済の自撰と考えることは困難であろう。しかし確認し得たかぎりでは、すべての句が疑いなく救済作であるので、残りの句も救済作と推測することができる。『救済付句』が救済の句集であることを確認し得たと考える。

#### 注

(1) 奥野純一氏「救済周阿心敬百番連歌合」をめぐって(『文芸言語研究』)

#### 文芸編第一〇巻

#### 凡例

- 一、原文の仮名遣はすべてそのままにしてある。
- 一、漢字の字体は当用漢字に従っている。
- 一、全句に筆者による通し番号を付し、脱落の想定される二一番、二二番の所も原文通りに番号を付した。
- 一、原文の誤字と思われるところに、(ママ)と注記した。
- 一、本書の翻刻を許可された神宮文庫当局に感謝申し上げる。

神宮文庫蔵「救済付句」翻刻(岩下紀之)

#### 救済付句

- 一 舟路の跡の山はいつくそ
- 二 奈原や昨日は見へしあさかずみ
- 三 名残は花にかきらざりけり
- 四 又や見ん有明の月のあさ霞
- 五 おもひにたへぬ身こそ侘ぬれ
- 六 明日までの日数のなきに春暮て
- 七 たのむは末の命なりけり
- 八 ちるとても今年にかきる花もなし
- 九 おもわぬ方に宿をこそとへ」三十三裏
- 一〇 花に行心や我をわするらん
- 一一 恨みてたにも慰にけり
- 一二 奈原の塩ひに霞む旅の空
- 一三 落葉は波の上にこそあれ
- 一四 夏刈の入江の巢鳥立かねて
- 一五 旅のあわれは宿ことにあり
- 一六 忘れしな山路の夕部浦の秋
- 一七 宿かわりてもあき風そふく
- 一八 草の葉や木の下露を残すらん」三十四表
- 一九 鳴や千鳥の水さむき声
- 二〇 舟くたす小夜深方に月出て
- 二一 泉す、しく松風そふく
- 二二 紅葉ちり山のをくより時雨きて
- 二三 露も涙もた、老のそて
- 二四 古里の一村す、き風ふきて
- 二五 月さひしとふらひ来ます友もかな

三六 野寺のかねのとをき秋の夜

三七 あすは山におもふあらし

三八 鳥もなき野辺のかり庭に日は暮て」三十四裏

三九 苔の衣そきたるまゝなる

四〇 馴ぬれは太山おろしの寒からて

四一 つみやむくひはさもあらはあれ

四二 三月残るかり場の雪の朝ほらけ

四三 ちかく見へたる松の村たち

四四 雪にふく関の嵐に夜はあけて

四五 春夏過て秋こそなれ

四六 雪に見は又いかならん峯の松

四七 うき身おもへはあちきな身や

四八 遠山の雪の夕部に釣たれて」三十五表

四九 都なれとも塩かまの浦

五〇 こゑちかき河原の千鳥夜鳴て

五一 おもひのほかの落葉こそあれ

五二 雪おれに常葉木ながら冬枯て

五三 朝衣日も夕暮に舟とめて

五四 ぬらす袖しのうらめしの身や

五五 我か恋しさそ偽りもなき

五六 おもひねは其人をのみ夢に見て

五七 いねかてにのみ月を見るかな

五八 ひとりある身を秋風の夜寒にて

五九 音する風や萩をしるらん」三十五裏

六〇 暮ことに心もそよと人まちて

六一 人のこゝろは露もなひかす

六二 ことの葉のかる、は秋の草に似て

六三 床さむくしてさらにねられす

六四 とはぬ夜は人をうつらの鳴こへに

六五 うきわかれをはしはしと、めよ

六六 古郷の山遠くなるみなど舟

六七 馬をとろきて人さわくなり

六八 宇治川の岸にあたれる渡し舟

六九 須も明石も舟のかよひ路」三十六表

七〇 うかりしやなか／＼旅の物かたり

七一 たつさわる杖こそ老の力なれ

七二 おもゑはとてや子をはうつらん

七三 鳴にそ虫の名をはわけたる

七四 山かけのすゝのしの屋にはたおりて

七五 塩路は遠し難波浦舟

七六 世、見ても御法のはしめ誰かする」三十六裏